

3. アンケート調査結果

(1) アンケート調査の概要

「限界突破キャンプ」の参加者21名を対象に、事前キャンプ1日目（Pre）、キャンプ最終日（Post）、キャンプ終了1ヶ月後（After）の計3回アンケート調査を行った。有効回答数は、全ての回答を得られた20名である。

質問項目の選定は企画委員会で検討し、平石（1990）が作成した「自己肯定意識尺度」のうち、対自己領域の一つ「自己実現的態度」の7項目と、岩瀧ら（2008）が作成した「中学生の教師への援助要請スキル尺度」から7項目の計14項目のアンケートを作成した。

事前、事後については、プログラムの中で質問紙に記入し、1ヶ月後は郵送にて調査を行った。

(2) 「自己実現的態度」の考察

信州大学教育学部 講師 瀧 直也

表1は、3回の調査結果を分散分析により比較した結果である。多重比較の結果、「前向きに物事に取り組んでいる」において、PreからPostにかけて有意な向上傾向があった。

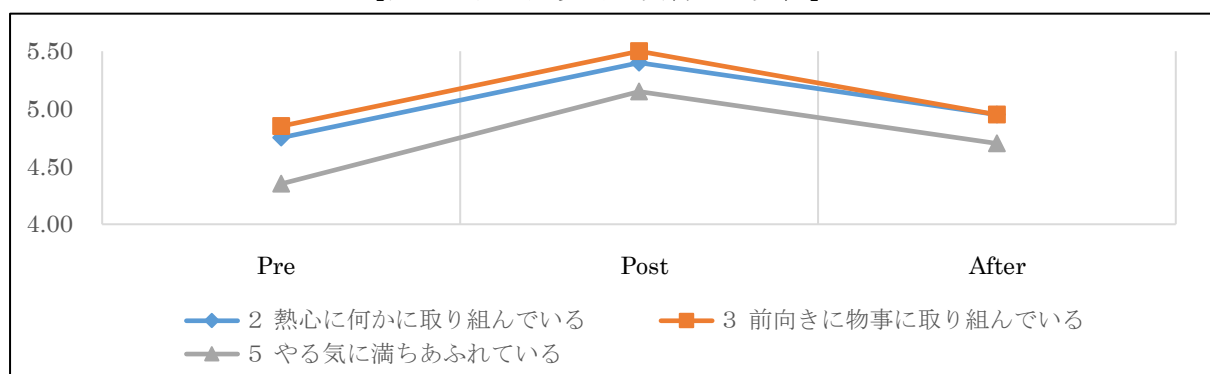
また、全ての項目においてPreからPostにかけて平均値は増加し、PostからAfterにかけては減少している傾向がみられる。特に図1に示す「2. 熱心に何かに取り組んでいる」「3. 前向きに物事に取り組んでいる」「5. やる気に満ちあふれている」の3項目は、PreからPostにかけて向上しており、これらは本キャンプがねらいとしていた「最後までやりぬくこと」を達成したことにより変化が現れていると推察できる。約70kmの距離を仲間と共に歩き通したことにより、達成感を味わい、自分に自信を持たれたことにより、「熱心に」「前向きに」「やる気」といった要素に影響をもたらしたことが考えられる。今後、この経験を日常生活につなげていくことで、自分の夢や目標に対しても積極的に関わっていくことが期待できる。

【表1 自己実現的態度の各項目の比較】

No.	質問項目	平均値（標準偏差）						F値	多重比較
		Pre		Post		After			
1	自分の夢を叶えようと意欲に燃えている	4.55	(1.05)	4.85	(1.27)	4.75	(1.02)	0.37	
2	熱心に何かに取り組んでいる	4.75	(0.97)	5.40	(0.94)	4.95	(1.00)	2.36	
3	前向きに物事に取り組んでいる	4.85	(0.93)	5.50	(0.95)	4.95	(1.10)	2.88	事前<事後†
4	自分の良いところを一生懸命伸ばそうとしている	4.75	(0.97)	5.20	(0.95)	4.90	(1.21)	0.95	
5	やる気に満ちあふれている	4.35	(1.27)	5.15	(1.09)	4.70	(1.17)	2.31	
6	自分のやりたいことが何なのか分からない	4.95	(1.19)	5.20	(1.32)	4.80	(1.54)	0.44	
7	自分には目標というものがない	5.30	(1.26)	5.45	(1.15)	5.05	(1.57)	0.46	

† p<.10

【図1 自己実現的態度得点の変化】



(3) 「援助要請スキル」の考察

群馬大学教育学部 准教授 岩瀧 大樹

いくつかの項目で天井効果、フロア効果が確認されたが、これらに関しては先行研究にて既に十分な信頼性が示されていることから、使用に問題はないと判断した。

各因子については、上記も含め、全体的にキャンプスタートの時点から高い平均値が確認された。本尺度は特に生活適応との高い関連性が明らかにされている。そのため、今回のキャンプ参加者は、スタートの時点である程度以上の生活適応を保ち、適切に周囲に援助を求めたり、援助を活用したりすることが可能であった背景が推測される。

「援助者探索」に関しては、明らかな得点の差は確認されなかったが、一定の高い水準を維持していたといえる。「適切な言語的はたらきかけ」に関しては、キャンプ直後の Post で最も高く、Pre と After とは有意な差があることが示された。また、「ノンバーバル」に関しては、Pre と Post においてのみ、得点の差が確認された。(図2参照)

有意差の確認された両因子では Post での得点が最も高いことから、今回のキャンプのプロセスにおいて、参加者たちが適宜言語的、非言語的に他者に援助を求め、活用していた様子が見えてくる。しかし、After においては、共に Pre の段階に戻る傾向が示された。ここから、参加者はキャンプ中、共通した課題達成に向け、適宜コミュニケーションを図りつつ、協力や協働のできる関係を形成していたことが推察できる。そして、日常生活に戻ると、従来の状態に近づいていることが読み取れる。得点は下がっているが、参加者たちのもともとの援助要請スキル水準は高い。ゆえに、参加者はキャンプの実施中、日常生活より密なコミュニケーションを構築し、援助要請スキルを活用していた、と判断できるだろう。

【図2 援助要請スキル得点の変化】

